二〇一一年六月一一日

夏霧の沖間遠なる汽笛かな　　わかば
蛙田や遠く瞬く街明かり　　とろうち
濃紫陽花吟行日記のしをりとす　　三　刀
黒南風や航跡白く一文字　　雅　流
薫風の拝殿指呼に畝傍山　　はく子
高舞へる蛍は星に紛れけり　　うつぎ
神池をふちどる紫紺花菖蒲　　菜　々
古町の小さき花屋釣忍　　つくし

二〇一一年六月一〇日

ダンプカー過ぎてうつぎの花嵐　　うつぎ
水底に躍る洩れ日や木下闇　　とろうち
草取りが日課となりし梅雨晴間　　ぽんこ
咲き満ちて渓流埋む谷うつぎ　　有　香
蛍とぶひかりの音符散らすごと　　よし子
ほととぎす檜の美林統べて鳴く　　雅　流
忽然と鯉現れし梅雨の池　　治　男

二〇一一年六月九日

諍いのごと縺れゆく夏の蝶　　なつき
長き根のゆらゆら揺るる花藻かな　　こすもす
老鶯の正調に杣明けにけり　　ともえ
しゃぼんだま歩きそむ子の手を逃ぐる　　はく子
初生りの胡瓜はチクと自己主張　　よし女
靄のごと香煙こもる梅雨の寺　　ひかり
恋蛍橋をくぐりて高舞へり　　雅　流
ほのかなる樹林の洩れ日著莪の花　　わかば

二〇一一年六月八日

時鳥しば鳴く里に住み古りぬ　　有　香
芭蕉句碑訪ふ道行きやほととぎす　　とろうち
野路愉し野いちごあればつまみもす　　美　咲
蛍火を放ちては入れ杉美林　　うつぎ
花楝うすむらさきを散りばめし　　はく子
幼子のひらけたる手にさくらんぼ　　英　子
万緑の大本山や大鳥居　　ひかり
優曇華を見つけてうれし裏の木戸　　きづな

二〇一一年六月七日

辿りつく延命水や寺薄暑　　ひかり
燦々と欅若葉の洩れ日かな　　百　合
万緑の嶺々屏風とす露天風呂　　菜　々
御所辞して定家かづらの咲く小路　　きづな
梅天に鴟尾反り返る古刹かな　　宏　虎
下闇に続く千本鳥居かな　　とろうち
恋蛍落合橋といふ辺り　　うつぎ
鈴の鳴るリュックのリズム風薫る　　よし女
万緑のトンネルとなる深山道　　美　咲
精霊のごとく夏の蝶無縁墓　　ぽんこ

二〇一一年六月六日

目鼻なき古りし地蔵や沙羅の花下　　ぽんこ
ほうたるの火が火を呼べり無音界　　うつぎ
ハンドルも軽し若葉の峠越　　こすもす
郭公の声湖の向かふより　　よし女
枇杷の実のたわわに破れ築地かな　　うつぎ
檻薄暑哲人顔のチンパンジー　　せいじ
宝前のなんじゃもんじゃに人だかり　　きづな

二〇一一年六月五日

万緑の谿に高鳴る瀬音かな　　うつぎ
万緑へ大きく一打鼓笛隊　　有　香
乳母車赤子すやすや合歓の風　　菜　々

毎日句会みのる選・二〇一一年八月二日